# 演説における機能的談話分析（２）
## ― オバマ、トランプ、バイデン大統領就任演説を通して ―

**進藤　三雄**

キーワード：大統領就任演説　談話分析　選択体系機能言語学　言語のメタ機能　Engagement

### 1. はじめに

本研究は、アメリカの共和党トランプ大統領 (1) と民主党バイデン大統領 (2) の就任演説に関するテキスト分析（進藤 2021）に、民主党オバマ大統領 (3) の就任演説を分析対象として加え、Systemic Functional Linguistics 選択体系機能言語学（SFL）の枠組みを使用して談話分析をおこなう。この研究の目的は、前述のトランプとバイデンの大統領の就任演説のテキスト分析で明らかになった 2 人の大統領の言語的特徴とオバマ大統領の就任演説の言語的特徴との間の共通点や特異点を指摘することで、それぞれの大統領が、国のリーダーとしてどのような談話ステラテジーを使用して聴衆に自分の「声」を届けようとしているかを探ることにある。

分析方法としては、各演説を言語の 3 つのメタ機能である、観念構成的機能、対人的機能、テクスト構成的機能の観点から分析し、比較・検討を加える。観念構成的機能においては過程構成を中心に分析し、対人的機能においてはアプレイザル理論における発話関与（Engagement）を中心に分析し、テクスト構成的機能においては、主題構造、接続関係及び使用語彙を中心に分析する。

### 2. 言語の 3 つのメタ機能

テキスト（談話）は常に「文化のコンテクスト」とそれに内在する「状況のコンテクスト」の二つのコンテクスト内で発生する。文化のコンテクストは、価値観やイデオロギーの違いが言語使用に影響を及ぼす部分で、日本語の敬語に見られるように、文化の違いにより言語における待遇表現のあり方は変わるし、呼称や儀式での発話なども話者の属する文化の影響を受ける。状況のコンテクストは文化的コンテクスト内で発生する具体的な場面で、インタビュー、買物での会話、教師と生徒との会話などがこれに相当する（図 1 参照）。例えば日本の朝市での買い物のやり取りとニューヨークのデパートでの買い物のやり取りを比べればわかるように、文化のコンテクストと状況のコンテクストの組み合わせがそれぞれのテキストを形成し、その類似性と相違性を生み出す。

選択体系機能言語学 (SFL) において、状況のコンテクストは、フィールド（活動領域）、

テナー（役割関係）、モード（伝達様式）の3つの要素から成り立つと考えられている。フィールドは、どのような社会的活動が起きているかに関する部分で、何について話され、何について書かれているかに関与する。テナーは、話し手（書き手）と聞き手（読み手）との間の社会的人間関係に関与する。モードは、会話やメールやテレビなど、どのような伝達チャンネルでメッセージが相手に伝わるかに関与する。

これら3要素に関係することばのやり取りはレジスター（言語使用域）と呼ばれ、図（1）に示されているように言語の３つのメタ機能によってテキストとして具現される（Halliday 1994, Martin & Rose 2008）。つまり、フィールドには観念構成的（ideational）機能が、テナーには対人的（interpersonal）機能が、そしてモードにはテクスト構成的（textual）機能がそれぞれ対応し、発話時の状況にふさわしいまとまりのあるテキストを構成する。

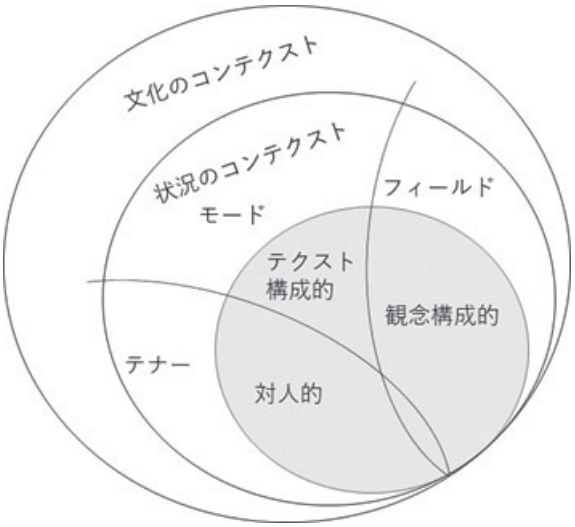


図１　文化／状況のコンテクストと言語のメタ機能（Martin & Rose 2008）

言語における観念構成的機能は、今何が起きているか、誰が誰に、いつ、どこで、なぜ、どのようにおこなわれているのかを取り扱う機能である。具体的には、過程中核部（動詞群）や参与要素（名詞群）や状況要素（副詞や前置詞群）の選択の仕方に関係する（図2参照）。対人的機能は、社会的人間関係における交渉に関係し、どのように人々が会話をやり取りするか、どのように感情を聴き手と共有しているかを取り扱う機能である。具体的には、ムード（法）やモダリティ等を取り扱う。テクスト構成的機能は、情報の流れに関するもので、観念構成的機能と対人的機能の情報を全体としてまとまりのあるテキストとして構成する機能である。具体的には、主題構造、接続関係や語彙連鎖などの結束構造を取り扱う。

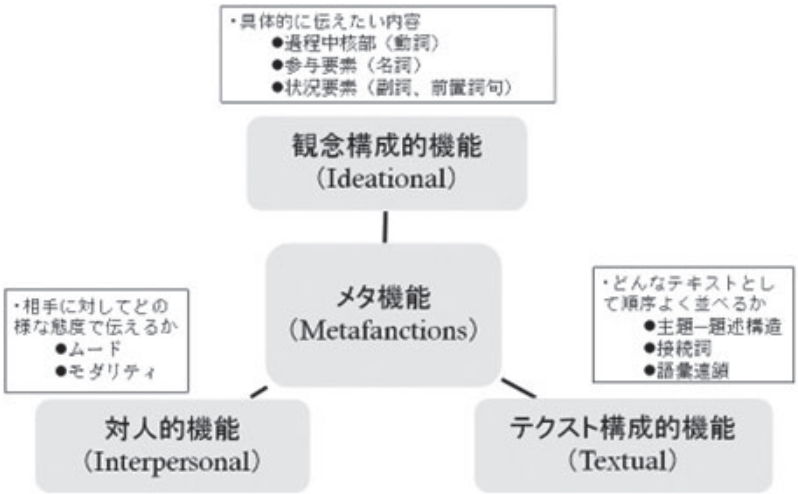


図２　言語の３つのメタ機能

**3. 分析データの概要**

表 1 は、オバマ、トランプ、バイデン大統領就任演説における演説時間、スピーチ速度、単語総数、異なり語数、節数を示したものである。

表 1　スピーチの概要

| | 演説時間 | スピーチ速度／分 | 単語総数 | 異なり語数 | 節数 |
|---|---|---|---|---|---|
| オバマ | 19 分 30 秒 | 122.7 語 | 2393 | 748 (31.3%) | 208 |
| トランプ | 16 分 20 秒 | 89.3 語 | 1458 | 432 (29.6%) | 149 |
| バイデン | 21 分 17 秒 | 117.2 語 | 2495 | 613 (24.6%) | 236 |

演説時間では、バイデンが 3 人の中で最も長く、21 分 17 秒であり、続いてオバマの 19 分 30 秒、そしてトランプの演説が 16 分 20 秒と最も短かった。スピーチ速度は単語総数を演説時間で割ったもので、1 分あたりの単語数を表している。アメリカ人の平均的な話す速度は 1 分間に約 125 語であると言われているが、大統領就任演説は聴衆からの拍手があった場合に十分な間を取りながら発話する必要があるため、一般的な発話に比べ全般的に遅い傾向にあることがわかる。その中でもトランプの演説スピードは 1 分間に 89.3 語と 3 人の中で最も遅く、続いてバイデンが 117.2 語であり、オバマは 122.7 語と 3 人の中で最も早いスピードであった。

単語総数に対する異なり語数の占める割合を比較してみると、オバマが 31.3%、トランプが 29.6%、バイデンが 24.6% であった。このことから、オバマは他者に比べ多様な語彙を使いながら演説を行い、一方バイデンは演説時間が一番長いにもかかわらず、他者に比べ少ない語彙を繰り返し使用しながら演説していることがわかる。

節数は、発言された全ての文（sentences）を分節した数である。SFL において節（clause）とは、過程構成（transitivity）を持つものとされ、それは過程中核部（動詞群）を 1 つ必ず含む最小の意味単位として考えられている。但し、本研究では名詞修飾節等の埋め込み節は、談話の展開に対する主題構成上の貢献がほとんどないため（ハリデー 2003: 91）無視する。節は、図（3）に示されてるように、過程中核部（process）を中心に名詞群などの参与要素（participants）がそれを取り囲むように存在し、さらにその周りを副詞や前置詞句のような状況要素（circumstances）が取り囲み、今何が起きているか、誰が関わっているか、そしてそれがどんな状況で起きているのかを具現する。複雑な文を節に分割することで、主語や動詞の選択や主題の展開の仕方など様々な分析の基本単位とすることができる。

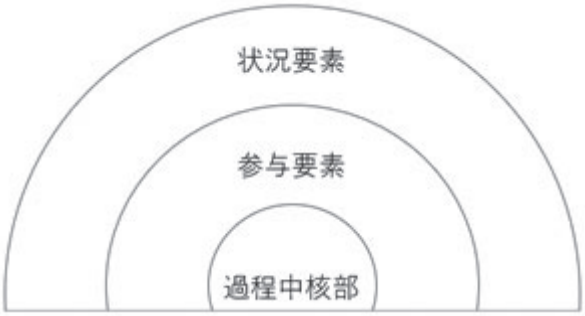


図 3　過程構成（transitivity）の構造

## 4. 観念構成的機能

### 4.1. 過程タイプ

Halliday（1994）は過程構成における過程中核部を次の 6 つのタイプに分類している。

(1)　物質過程　(material process)
(2)　行動過程　(behavioral process)
(3)　心理過程　(mental process)
(4)　発言過程　(verbal process)
(5)　関係過程　(relational process)
(6)　存在過程　(existential process)

物質過程は、我々の物質世界に関わる動詞で、go、give、make、unite、write、rain などの動作（doing）や出来事（happening）を表す過程を含む。行動過程は、特に人間の肉体的、心理的行為を表す動詞で、breathe、cough、cry、laugh、dream、dance などが含まれ、主体となる参与要素は意識を持った存在か、そうでない場合は節が擬人化されている場合である。また、物質過程と行動過程は that 節などで投射（projection）することは基本的にできない。心理過程は心理活動に関わる動詞で、知覚 (see、hear)、感情 (like、fear)、認識 (think、understand) などの動詞が含まれ、これらの動詞の多くは心理的内容を投射する

ことが可能である。発言過程は発言に関わる動詞であり、例えば、say、state、tell、promise、explain などが相当し、その発言内容は直接的、間接的に投射できる。関係過程は、ある参与要素の属性描写に関する場合と、参与要素の同定や役割に関する場合の二つがあり、be、belong to、equal、seem、remain、represent などが含まれる。存在過程は、there is の be 動詞に代表されるもので、他に exist, stand, have などが含まれる。

### 4.2. 過程中核部分析

表(2)は各大統領の就任演説で使われた過程中核部の出現数と比率を示したものである。

表 2　過程中核部の出現数と出現率

| 大統領＼過程タイプ | | 物質 Material | 行動 Behavioral | 心理 Mental | 発言 Verbal | 関係 Relational | 存在 Existential | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| オバマ | 度数 | 106 | 6 | 18 | 14 | 61 | 3 | 208 |
| | % | 51.0% | 2.9% | 8.7% | 6.7% | 29.3% | 1.4% | 100.0% |
| トランプ | 度数 | 97 | 5 | 10 | 3 | 30 | 4 | 149 |
| | % | 65.1% | 3.4% | 6.7% | 2.0% | 20.1% | 2.7% | 100.0% |
| バイデン | 度数 | 112 | 9 | 27 | 24 | 56 | 8 | 236 |
| | % | 47.5% | 3.8% | 11.4% | 10.2% | 23.7% | 3.4% | 100.0% |

3 者の過程中核部の頻度を比較をしたところ、有意な違いが認められた ($\chi^2(10) = 21.87$, $p < .05$)。この表から、まず各大統領に共通している点として、一番多く使用されている過程中核部は物質過程であることがわかる。このことは、就任演説において各大統領が今後 4 年の就任期間にどのような政策を実行してアメリカを導いていくかを、具体的な行動を含めながら各自のマニュフェストとして表明しようとしている表れである。

3 者間で有意な違いが認められる点として、オバマは他の大統領に比べ関係過程の出現率が 29.3%（表の下線部）と多い。これはオバマが be 動詞を多用し、例えば、Today I say to you that the challenges we face are real. They are serious and they are many. のように属性表現を使いながら直面する課題が現実的で深刻なものが多いことを説明したり、For we know that our patchwork heritage is a strength, not a weakness. のように同定表現を用いて、アメリカの「寄せ集めの伝統」が弱みではなく強みであるという認識を聴衆と共有する場合などに見られる。

トランプは 3 者の間で物質過程が 65.1% と最も多く、例えば、We will bring back our borders.（我々は国境を回復します）や、We will make America wealthy again.（アメリカをまた豊かにします）のように、具体的な行動に関する表現が多く見られる。一方でトランプの発言過程の使用率は 2.0% と少ないが、このことは、トランプが聴衆に語りかけたり

他人の発言を引用したりすることが少ないことを示している。

バイデンの演説の特徴として、発言過程の使用率が 10.2% と他者より多く使われている点が挙げられる。このことはバイデンが他の大統領に比べ、聴衆に語りかけるような表現や他者の発言を多く引用していることを示しており、例えば、So I ask you let's say a silent prayer for those who lost their lives, those left behind and for our country. ... Amen. のように、COVID19 で命を落とした人々に対して聴衆に黙祷を求める発言にもそれが確認できる。

## 5. 対人的機能

### 5.1. 発話関与（Engagement）

SFL における Appraisal 理論（Martin & White 2005, Martin & Rose 2007）は、言語の対人的機能における評価に関する理論で、話し手や書き手の心的態度がどのようにテキストに具現されているのかを分析・記述するための理論である。Appraisal 理論は、感情的反応・道徳的評価・美的評価を取り扱う Attitude、評価の強弱の程度を調節する Graduation、発話関与に関する Engagement の 3 つの相互に影響しあう領域から成り立つ。本研究では、その中の発話関与 (Engagement) の観点から 3 者の演説における対人的機能を分析する。

発話関与は、話し手や書き手がある意見や価値にどう向き合っているかを示すもので、話し手や書き手がどの程度自分の発言に他者の意見や判断を取り入れているかを取り扱う（Martin & Rose 2007: 58）。

図 4　Engagement のシステム（Martin & Rose 2007）

図（4）に示されているように、発話関与はまず発話された内容が単独発言（monogloss）か多重発言（heterogloss）かに二分される。単独発言は、ある命題を話し手が常識的で当たり前のこととして提示する場合で、反対意見や他の視点が入り込む余地のない表現である。例えばトランプの、Americans want great schools for their children, safe neighborhoods for their families, and good jobs for themselves. という発言が該当する。多重発言は、話し手や書き手が自分の考えとは異なった視点や意見を自らの発話や文章に取り入れることで、話し手や書き手の命題内容が多くの意見の中の一つとして提示される発言であり、それによって聴き手や読み手との対話の場を保証するものである。多重発言は、投射（projection）、モダリティ（modality）、譲歩（concession）の 3 種類の談話ストラテジーによって具現さ

れる（Martin & White 2005, Marin & Rose 2007）。

投射は間接的・直接的引用に代表されるもので、話し手が自分以外の他者の発言や意見を自分の発話に取り入れることで、結果的に当該文脈で展開している話者の主張を補強する表現方法である。モダリティは、話し手が外的世界や内的世界との関わりにおいて描き取られた事態や命題に対しての話し手の立場からの捉え方であり、話し手の発話・伝達的な態度の在り方である（森山他 2000, 中右 1999）。譲歩は、Martin & Rose (2007: 56) が ‘counterexpectancy’ として定義しているように、最初の節の命題内容から喚起される想定とそれに続く 2 番目の節の命題内容との対立関係を表す。つまり譲歩を含んだ発言は、話し手が聞き手の予測という自分以外の「声」をモニタリングしつつ、それを談話に取り入れながら対立する主張を試みる表現方法と言える。

### 5.2. 発話関与（多重発言）分析

表（3）は、それぞれの演説において出現した多重発言（heterogloss）の出現数を示したものである。まず多重発言の使用数の合計において、オバマが 64 回、トランプが 66 回であるのに対し、バイデンは 88 回と一番多く使用していることがわかる。このことから、全体的傾向としてバイデンは他の二人より、より多くの他者の「声」を演説に取り入れていることがわかる。

表 3　多重発言（heterogloss）の出現数

| | | 投射 (projection) | モダリティ (modality) | 譲歩 (concession) | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|
| オバマ | 度数 | 6 | 51 | 7 | 64 |
| トランプ | 度数 | 2 | 48 | 16 | 66 |
| バイデン | 度数 | 10 | 71 | 7 | 88 |

まず投射（projection）において、バイデンの使用回数は 10 回であり、3 人の中で一番多い。バイデンは、キング牧師、リンカーン大統領、American Anthem の歌詞、聖アウグスティヌス、そして自分の父母の言葉まで引用している。例えば、現在のアメリカを分断している uncivil war（まともでない戦い）を終わらせるためには、to stand in the other person’s shoes, as my mom would say（母がよく言っていたように、他人の立場に立って物事を考えること）が必要だと母親の言葉を引用しながら聴衆に団結を訴えている。

モダリティに関してもバイデンの使用回数が 71 回と 3 人の中で一番多く、このことからバイデンが助動詞を多用しながら断定的な発言である単独発話 (monogloss) を避けつつ、自分の発する情報の蓋然性や義務性の程度を様々に調整しながら慎重に聴衆を説得しようとしている姿勢が伺える。Halliday（1994: 362）は、モダリティが次のように高位、中位、

低位の意味的レベルにおいて、異なる助動詞によって表現されるとしている。

高位：must, ought to, need, has to, is to
中位：will, would, shall, should
低位：may, might, can, could

この指標に沿って3者の演説に使用された助動詞の出現数と比率を示したものが表（4）である。この分析結果から、高位の助動詞に関しては有意な違いは見られなかったものの、中位の助動詞ではトランプが89.6%と高い使用比率を示している。3大統領は共通して助動詞willを多く使用してはいるが、トランプは他者に比べ特に中位の助動詞willを多用しており、彼の使用した助動詞全体におけるwillの使用比率は87.5%と9割近くを占めている（参考：オバマは37.3%、バイデンは39.4%であった）。

オバマとバイデンのモダリティの使用については、中位と低位のモダリティを中心にバランスよく使用されていることがわかる。特に低位のモダリティでは、canやmayといった助動詞を中心にオバマが21回（41.2%）、バイデンが26回（36.6%）使用しており、トランプの2回（4.2%）とは対照的により積極的に使用していることがわかる。このことから、オバマとバイデンが低位の助動詞を演説の中に多用することで、自己の主張に対する聴衆からの対抗意見を受け入れる余地（entertainment）を残し、聴き手との議論の場を広げよう（expand）としている姿勢が伺える。一方で、トランプにはその様な姿勢は見られない。

表4　高位・中位・低位のモダリティ出現数と比率

| | | 高位 | 中位 | 低位 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|
| オバマ | 度数 | 7 | 23 | 21 | 51 |
| | % | 13.7% | 45.1% | 41.2% | 100.0% |
| トランプ | 度数 | 3 | 43 | 2 | 48 |
| | % | 6.3% | 89.6% | 4.2% | 100.0% |
| バイデン | 度数 | 13 | 32 | 26 | 71 |
| | % | 18.3% | 45.1% | 36.6% | 100.0% |

（$\chi^2(4) = 29.236, p < .01$）

表（3）の譲歩（concession）に関しては、トランプの使用回数が16回で、オバマの7回、バイデンの7回よりも多くなっている。トランプの譲歩の例として、We will seek friendship and goodwill with the nations of the world, but we do so with the understanding that it is the right of all nations to put their own interests first. のように、アメリカは世界と友好関係を

結ぶのはやぶさかではないが、それはあくまでアメリカ・ファーストを前提にした話であるとの発言などに見られる。

## 6. テクスト構成的機能

### 6.1. 主題分析

#### 6.1.1. 主題とは

SFL において主題（Theme）とは、既知またはコンテクストから読み取れる情報で、メッセージの起点としての役割を果たす。主題に後続する部分は題述（Rheme）と呼ばれ、主題を展開するもので、新情報を含んでいる。節は基本的に主題と題述の順で構成され、英語の文法においては、主題は節の最初の位置に置かれる（Halliday 1994）。また主題構造は、テクスト形成的（textual）、対人的（interpersonal）、話題的（topical）主題の 3 種類の主題によって形成される。テクスト形成的主題は、節の意味をテキストの他の部分と関連させる機能を持ち、主に接続詞や接続付加詞などがこれに相当する。対人的主題は、聞き手や命題に関する話し手の心的態度を表出する機能を持ち、呼び掛け語や unfortunately のようなモーダル付加詞などが含まれる。話題的主題は節の経験的意味を表す主題で、人や物事を含む参与要素や、状況要素がこれを担当する。節の主題構造においては、話題的主題は必須であり、それに先行するテクスト形成的主題と対人的主題は任意である。このような多重主題（multiple theme）は、図 5 のように、テクスト形成的主題 ^ 対人的主題 ^ 話題的主題の順で現れる（Halliday 1994:55, 龍城 2005:92）。

| | | | |
|---|---|---|---|
| Well, but then, | Ann, surely wouldn’t | the best idea | be to join the group. |
| テクスト形成的 | 対人的 | 話題的（経験的） | |
| 主題（Theme） | | | 題述（Rheme） |

図 5　多重主題構造

#### 6.1.2. 主題構造分析

表（5）は、3 大統領の演説におけるテクスト構成的主題、対人的主題、および話題的主題のみの出現数と出現比率を示したものであり、主題使用状況において 3 者間で有意な違いが認められた（$\chi^2(4) = 19.065, p < .01$）。オバマは他の２者に比べ、テクスト形成的主題が 44.1% と多く、一方で話題的主題のみの場合が 47.9% と少なかった。トランプは話題的主題のみの場合が 62.5% と多く、一方で対人的主題の出現率は 2.6% と少なかった。バイデンは対人的主題が他者に比べ 12.4% と多く、一方でテキスト形成的主題が 32.0% と少なかった。

以上のことから、オバマはテクスト形成的主題としての接続表現を多く用いることで、論理的整合性を重視しながら聴衆を説得しようとしていると言える。一方トランプは、対

人的主題を使い聴衆に呼び掛けたりすることはほとんど無く、話題的主題のみを用いながら、簡潔に政権公約（マニュフェスト）を聴衆に訴えている。

表5　主題の使用状況

| | | テクスト形成的 (Textual) | 対人的 (Interpersonal) | 話題的のみ (Topical) | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|
| オバマ | 度数 | 94 | 17 | 102 | 213 |
| | % | 44.1% | 8.0% | 47.9% | 100.0% |
| トランプ | 度数 | 53 | 4 | 95 | 152 |
| | % | 34.9% | 2.6% | 62.5% | 100.0% |
| バイデン | 度数 | 77 | 30 | 134 | 241 |
| | % | 32.0% | 12.4% | 55.6% | 100.0% |

バイデンは、聴衆に対して呼び掛け語やモーダル付加詞などの対人的主題を多用することで、聴衆との対話を重視しながら説得をしようとしていると言える。呼び掛け語は、法構造に影響を及ぼすものでもなく、また残部の意味に貢献するものでもないが、これらの要素は発信者と受信者の対人関係的特性を合図する上で重要であると言える。例えばバイデンは、Look folks, all my colleagues I serve with in the House and the Senate up here, we all understand the world is watching. のように、Look folks, all my colleagues ~ という呼び掛け語を文頭に使うことで聴衆との心理的距離を縮め、同志として共通の立場を共有しようとしている。またバイデンの発言に対人的主題が多い理由の一つに疑問節を積極的に演説の中に取り込んでいることが挙げられる。例えば、Will we master this rare and difficult hour? Will we meet our obligations and pass along a new and better world to our children? I believe we must and I'm sure you do as well. とう発言では、民主主義の危機、ウィルス感染、拡大する不公平、制度的人種差別、気候変動など、現在アメリカが抱える様々な深刻な課題を踏まえ、自分たちがこの稀にみる厳しい時代を克服し、責任を持ってより良い世界を子どもたちに引き継ぐ意思があるのかと聴衆に問い掛け、更にそれに自問自答するように明確な答えをメッセージとして発している。このような疑問節では will という定性が節頭に出現しているが、定性は聞き手に情報を要求している点で対人的機能を担い対人的主題に含まれる。バイデンはこのような疑問節を計6回使うことで、聴衆に問い掛けながら聴衆と対話の場を設定している。こような疑問節の使用はオバマとトランプの演説には1度も認められなかったことからも、疑問節の使用はバイデンの演説の特徴のひとつと言える。

**6.1.3. 話題的主題分析**

次に、無標の話題的主題のみに注目し、どのような比率で参与要素が主題として使われているか調べた。表（6）は、各大統領が使用した話題的主題である 1 人称（We, I）、2 人称、3 人称、および過程（動詞）の出現数とその比率を示したものである（但し、この表に示されている主題は文脈上省略されているものも情報の流れに影響を及ぼすものとしてカウントしてある。また英語では命令形の場合動詞が節頭に出現するため話題的主題に含まれる）。

表 6　話題的主題の内訳

| | | We | I | You | 3rd P | 過程 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| オバマ | 度数 | 52 | 3 | 4 | 111 | 10 | 180 |
| | % | 28.9% | 1.7% | 2.2% | 61.7% | 5.6% | 100.0% |
| トランプ | 度数 | 49 | 3 | 3 | 68 | 7 | 130 |
| | % | 37.7% | 2.3% | 2.3% | 52.3% | 5.4% | 100.0% |
| バイデン | 度数 | 71 | 30 | 5 | 89 | 12 | 207 |
| | % | 34.3% | 14.5% | 2.4% | 43.0% | 5.8% | 100.0% |

（$\chi^2(8) = 36.54, p < .01$）

3 者に共通して言えることは、We が主題として一番多く使用されている点が挙げられる。これは、内藤（2001: 39) が指摘しているように、アメリカの歴代大統領の就任演説では We が多く使われる傾向にあるという調査結果と一致する。その理由として、We（inclusive *I*）は話し手と聞き手との間の心理的距離を縮める働きがあり（Brown & Levinson 1987）、聞き手との間に共通意識を獲得しやすくする働きがあるためだと考えられる。

3 者間の有意な違いとして、オバマは 3 人称の主題を 61.7% と多く使用してる点が挙げられ、例えば、our common humanity（我々の共通の人間性）や、those values upon which our success depends（私たちの成功を左右する価値観）のような抽象的な主題を多く使用している。このことはオバマが 1 人称や 2 人称を使った個人的な主張よりも抽象名詞を含めた 3 人称の主題を使うことで、より客観的で理論的内容を重視した演説を目指している表れであると言える。

バイデンが 1 人称の I を主題として使っている回数は 30 回（14.5%）で、オバマやトランプに比べ多いことがわかる。このことは、バイデンが聴衆に私的に語り掛けながら、聞き手との間に個人的な対話の場を構築しようとしている表れだと考えられる。そのことは、例えば、And I pledge this to you. I will be a President for all Americans, all Americans. And I promise you I will fight for those who did not support me as for those who did. のような、自分

を支持した人と同様に自分を支持しなかった人のためにも大統領として懸命に戦うという誓いや約束と取れる発言に表れている。

トランプの話題的主題における特徴として、オバマ同様、1人称のIの使用が3回と少ない点が挙げられるが、それ以外には特に大きな特徴は見られなかった。

### 6.2. 接続構造分析

接続詞はテクストの結束性を高める重要な機能を有している（Halliday & Hasan 1976）。表（7）は各大統領の演説の節頭において使用された主要な接続詞の出現数を示したものである。この表より、3者は共通して順接の接続詞 and を一番多く使用していることがわかる。

表7　節頭に使われている主要接続詞の出現数

| | | and | because/for | but/while/yet | if | that |
|---|---|---|---|---|---|---|
| オバマ | 度数 | 36 | 11 | 12 | 1 | 24 |
| トランプ | 度数 | 28 | 2 | 16 | 0 | 3 |
| バイデン | 度数 | 40 | 4 | 6 | 9 | 3 |

まずオバマの接続詞使用に関する特徴として、理由を示す because/ for が11回と他の2名と比較して多く使用されている点が挙げられる。例えば、オバマは、We honor them not only because they are guardians of our liberty, but because they embody the spirit of service; a willingness to find meaning in something greater than themselves. のように、戦死した英雄たちに敬意を表すべき理由として、彼らが自由を守ってくれただけでなく、奉仕の精神の意義を体現してくれた点を because を使いながら国民に説明している。また接続詞 that に関して、オバマが24回と多く使用しているのに対し、他の2名の使用回数は3回と少ない点も特徴的である。例えばオバマは前年の経済危機（リーマンショック）の教訓を、this crisis has reminded us that without a watchful eye, the market can spin out of control --- and that a nation cannot prosper long when it favors only the prosperous のように述べ、市場というものはしっかりと監視しなければ制御不能になってしまい、富裕層ばかり優遇すると国家は長く繁栄できないことを接続詞 that を使いながら説明している。

トランプの接続詞使用で特徴的なのは、but/ yet/ while のような逆説・対照・譲歩を表す接続表現を16回と多く使用している点で、例えば、We've made other countries rich, while the wealth, strength, and confidence of our country has dissipated over the horizon.（我々は他の国々を金持ちにしてきたが、一方でこの国の富と力と自信は地平線の向こうに消えていった）という発言に見られるように、対立する意見を取り上げながら自分の主張を強調する表現手法を取り入れている。

バイデンは他の接続詞に比べ and の使用回数が 40 回と高く、節を順序よく意味を積み重ねながらテキストの結束性を確立していると言える。また接続詞 if に関して、バイデンの使用回数は 7 回であり、オバマの 1 回、トランプの 0 回と比較して多いことがわかる。例えば、バイデンは選挙で彼を支持しなかった聴衆に対して、彼の発言に耳を貸し、これからの自分の行動を見て欲しいと協力を求めつつ、If you still disagree, so be it. That's democracy. That's America.（それでも賛成できないなら、それは仕方がありません。民主主義とはそういうものです。アメリカとはそういうものです）のように、一方的に自分の希望を押し付けるだけでなく、if 節を使いながら聴衆との議論の場を担保している。

### 6.3. 語彙分析

#### 6.3.1. 共通使用語彙

表（8）は 3 大統領の演説で共通して使われた名詞（固有名詞を含む）を頻度順に示したものである。使用回数の個人差はあるものの、42 語が共通使用語彙としてヒットし、その中で 3 人が共通して取り上げている関心事として、job（経済・失業問題）、border, world, alliance（外交政策）、school, child, woman, life（教育・福祉）、unity, hope, future, challenge（分断社会への対応）、patriot, oath, example, heart, strength（アメリカの伝統･精神）などが見て取れる。また God の使用が 3 人に共通している点も就任演説の特徴といえる。

表 8　3 大統領の共通使用語彙と出現数

| |
|---|
| America (44), nation (41), people (29), day (24), today (19), world (19), Americans (18), child (14), power (13), time (13), God (13), job (12), moment (12), way (11), heart (10), challenge (9), life (9), unity (9), woman (9), year (9), President (9), hope (8), oath (8), strength (7), word (7), fear (6), hour (6), border (5), family (5), future (5), hand (5), United States of America (5), example (4), interest (4), land (4), politics (4), school (4), alliance (3), conviction (3), office (3), patriot (3), sight (3) |

#### 6.3.2. 特徴的語彙

図（6）は 3 大統領が使った内容語の中で、特に名詞に限って対応分析したものである。分析においては使用に差異の認められる上位 35 語をプロット上に表示し、原点（0.0）周辺に存在している 3 者に共通して使用された語は排除してある。3 人の中でオバマとバイデン間の距離はトランプとの距離に比べ比較的近い場所に位置していることから、オバマとバイデンは共通して使用している語彙が多いと言える。実際、オバマとバイデンの間には、多くの語彙が付置されていることからもそのことが確認できる。一方で、オバマとトランプ､バイデンとトランプ間にはそれほど多くの語が付置されていない。このことから、オバマとバイデンの使用語彙の選択傾向が似ていると言える。これは同じ民主党の大統領

としてのイデオロギーが似ていることや、党専属のスピーチライターの影響があるものと考えられる。

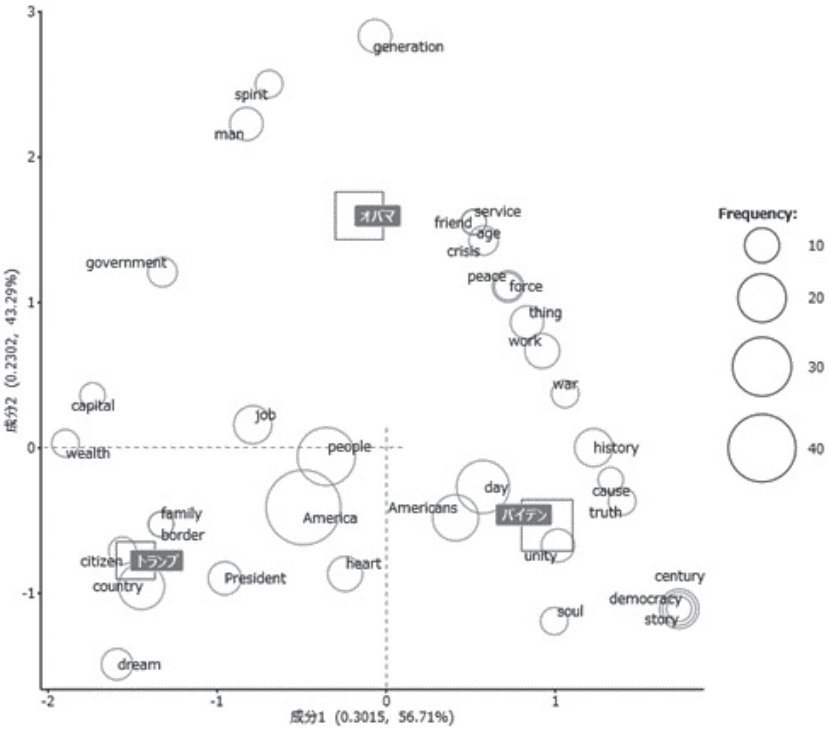


図6　オバマ、トランプ、バイデンの特徴的語彙（名詞）

図（6）において、原点（0，0）から見てオバマの方向に generation, spirit, man の単語が離れて布置されているので，それらの言葉はオバマの演説に特徴的であり、演説に特に多く出現していたことを示している。オバマが spirit を使用した例として、What is required of us now is a new era of responsibility -- a recognition, on the part of every American, that we have duties to ourselves, our nation, and the world, duties that we do not grudgingly accept but rather seize gladly, firm in the knowledge that there is nothing so satisfying to the spirit, so defining of our character, than giving our all to a difficult task. という発言があり、そこでは、今求められているのは新たな責任の時代であり、アメリカ人ひとりひとりが義務を負っているということを認識し、その義務をしぶしぶではなく喜んで受け入れ、難題に対して全力で取り組むということが何よりも自分の精神を満たし、アメリカ人の気質を決定づけるものなのだと強調する。

トランプの特徴的語彙としては、dream, country, border が見て取れる。トランプは、country でアメリカの衰退経済の原因は他国への援助が原因だと主張し、border で移民政策をより厳しくする必要があると主張し、dream でアメリカの豊かな富を追求する夢をも

う一度取り戻そうと訴える。America という固有名詞は 3 人に共通して多く使われている語ではあるが、中心点よりトランプ寄りに位置している。これはトランプが America first の方針をスピーチに色濃く反映している結果である言える。また、job もトランプとオバマとの中間に位置するが、ややトランプよりに布置されている。これはアメリカの経済の冷え込みや、さびついた工業地帯（Rust Belt）と呼ばれる地域に代表される失業率の高さを背景に、海外から仕事をアメリカに取り戻すというトランプの主張の表れである。オバマの job の使用は、前年に起きた経済危機（リーマンショック）の影響による失業率の改善に向けた発言が多いためである。

バイデンの特徴語として、democracy, unity, history などが主なものとして挙げられる。バイデンは、分断されたアメリカ社会を unity という語で団結を訴え、就任演説の直前にトランプ支持者による選挙無効を求めた議会襲撃事件を踏まえて democracy の危機を危惧し、その大切さを強調している。更に history で過去のアメリカの伝統を守り、その精神を思い出すべきだと主張している。

**6.3.3. 語彙的難易度**

表（9）は、各大統領が演説で使用した内容語の中の、名詞の難易度を示している。CEFR 総得点は、CEFR（Common European Framework of Reference for Languages）の６段階レベル（A1 易～ C2 難）に沿って仕様語彙に１～６点を付与し、それぞれの語の出現回数を掛け合わせ、合計したものである。また難易度は CEFR 総得点を名詞総数で割った数値である。

表 9　使用名詞の難易度の比較

| | 名詞総数 | CEFR 総得点 | 難易度 |
|---|---|---|---|
| オバマ | 530 | 1767 | 3.334 |
| トランプ | 304 | 861 | 2.832 |
| バイデン | 479 | 1438 | 3.002 |

表（9）より、オバマの使用語彙の難易度は 3.334 で 3 人の中で最も高く、バイデンの使用語彙の難易度は 3.002 で中位に位置し、トランプの使用語彙の難易度は 2.832 で 3 人の中で最も難易度が低かった。このことから、オバマの演説は高学歴層やエリート層をターゲットにした難易度の高い格式のある（ceremonious）演説と言え、一方トランプの演説は、労働者階級や英語を母語としないマイノリティにも容易に理解できる平易な語彙を多用した形式張らない（casual）演説であると言える。

**7. まとめ**

3 大統領の就任演説の共通点として、観念構成的機能を担う過程中核部では物質過程が主に使用され、対人的機能における発話関与（Engagement）では助動詞 will が主なモダリティとして使用され、テクスト構成的機能における主題構成では話題的主題である We が多く使用され、また接続詞としては and が多く使用されていることなどが挙げられる。これらは各大統領が就任演説の場で、今後 4 年間の政策方針（マニフェスト）を具体的に聴衆に訴え、国民と一丸となって実行する意志を表明する必要性から当然予想されることである。また対人的機能に関して、3 大統領が Bible の一節を引用している点も共通点として付記しておきたい。

一方、3 者間の特徴的な違いとして、オバマは関係過程を多く使用しながら、現在アメリカが抱える課題やそれに対して国民が持つべき心構えや伝統的精神を丁寧に聴衆に説明している。対人的機能においては、オバマは投射、モダリティ、譲歩を比較的バランスよく使用しながら自分の発言に他者の声を取り入れている。テクスト構成機能では、because/ for 及び that などの接続詞を節頭に多用することで原因・理由を示しつつ、論理的な談話展開を確立していると言える。また話題的主題として抽象名詞や物質名詞などの 3 人称を多用することで、自らの主張に客観性と普遍性を持たせている。特徴的語彙としては generation, spirit, man という単語を繰り返し使用しながら、アメリカ建国以来引き継いできた伝統的奉仕の精神を、世代を超えて後世に伝えようとする格式と説得力のある演説を実現している。

トランプは、他の二人に比べ物質過程を特に多く使用することで、具体的な政策提言を明確に示しながら聴衆の支持を得ようとしている。対人的機能においては、他の大統領に比べて譲歩を多く使用し、but/while/yet といった逆説・譲歩を表す接続詞を多用しながら聴衆の想定を覆す形で自身の主張の正当性を主張しようとしてる。モダリティ関連では will の使用が助動詞全体の 9 割近くを占めるなど、多様なモダリティを使用する他の二人に比べて対人配慮は少なく、直接的な表現が多い演説であると言える。テクスト構成的機能においては We という話題的主題を中心に使用し、dream, country, border などの語を中心に、誰にでも理解できる平易で簡潔な表現を使用しながら力強くアメリカ・ファーストの政策を訴えている。

バイデンの演説の特徴としては、発言過程を多く演説に取り入れ、他者の声を多く引用するなど聴衆との対話を重視した演説を目指していると言える。モダリティ使用においても、特に低位の助動詞を多く使用しながら、断定的発言を避けつつ慎重に他者との対話の場を確保しながら聴衆を説得しようとしている。また彼は、他の大統領に比べ、呼び掛け語などの対人的主題を多用し、また聴衆に問い掛ける疑問節を多く使用するなど、聴衆との個人的な対話を重視しようとしている。そのことは話題的主題の 1 人称 I の使用比率が高いことにも表れている。テクスト構成的機能においては if 節の仮定表現を使用するこ

とで他者の「声」を演説に取り入れることに努めている（Swain 2009: 172）。バイデンの演説は、以上のような聴衆との対話を重視する言語ストラテジーを演説に多く取り入れ、unity, democracy, history などの語を多用しながら、分断されたアメリカ社会に団結を訴え、危機に瀕した民主主義を取り戻すよう国民に協力を求めるものとなっている。

今回のアメリカ大統領の就任演説の分析を通して、3 大統領に共通する言語的特徴と特異性を確認することができた。また同時に言語の３つのメタ機能である、観念構成的機能、対人的機能、テクスト構成的機能は個別に独立した機能として存在するのではなく、例えば観念構成的機能における発言過程の使用が多ければ対人的機能における引用も多くなり、テクスト構成的機能を担う接続詞と対人的機能の発話関与（Engagement）が関連するなど、各機能が互いに関連し合いながら全体としてまとまりのある談話を構成していることも確認できた。今回の研究では、民主党 2 名、共和党 1 名の大統領について検証したが、就任演説におけるより精緻で普遍的な言語的傾向を知るためには更に分析対象を増やす必要がある。

**注**

(1) 民主党オバマ大統領の就任演説は、
https://www.youtube.com/watch?v=3PuHGKnboNY&t=1s より引用。
(2) 共和党トランプ大統領の就任演説は、
https://www.bbc.com/news/world-us-canada-38697653 より引用。
(3) 民主党バイデン大統領の就任演説は、
https://www.bbc.com/news/world-us-canada-55656824 より引用。

**参考文献**

Brown, P. and Levinson, S. C. (1987), *Politeness: Some universals in language usage*. New York: Cambridge University Press.

Halliday, M.A.K. (1994), *An Introduction to Functional Grammar*. London: Edward Arnold.

Halliday, M.A.K. & Hasan, R. (1976), *Cohesion in English*. London and New York: Longman.

Martin, J. and Rose D. (2007), *Working with Discourse*, London: Continuum.

Martin, J. and Rose D. (2008), *Genre Relations: Mapping Culture*. London: Equinox Publishing Ltd.

Martin, J. R. and White P. R. R. (2005), *The Language of Evaluation: Appraisal in English*, New York: Palgrave Macmillan.

Swain, E. (2009) ‘Constructing an Effective ‘Voice’ in Academic Discussion Writing; An Appraisal Theory Perspective’, in A. McCabe and M. O’Donnell and R. Whittaker (eds), *Advances in Language and Education*, London: Continuum. pp.166-184.

進藤三雄 (2021)「演説における機能的談話分析：トランプとバイデンの大統領就任演説を通して」『アドミ

ニストレーション』第 28 巻第 1 号 , pp.65-79, 熊本県立大学総合管理学部 .
龍城正明 (2005)「ことばを伝える」龍城正明 ( 編 )『ことばは生きている：選択体系機能言語学序説』pp.89-92, くろしお出版 .
内藤誼人 (2001)『絶対相手に Yes と言わせる心理作戦』オーエス出版 .
中右 実 (1999)「モダリティをどう捉えるか」『言語』 vol.28, 26-33, 大修館書店 .
ハリデー , M.A.K. (2003)『機能文法概説：ハリデー理論への誘い』山口 登、筧 壽雄（訳）, くろしお出版 .
森山卓郎・仁田義雄・工藤 浩 (2000)『モダリティー』( 日本語の文法 3) 岩波書店 .